

F1-18

TeamX と CIAM (近代建築国際会議) 第 10 回大会に関する考察

Study on the 10th of CIAM(Congrès International d'Architecture Moderne) and Team X

○宇於崎勝也¹Katsuya Uozaki¹

Abstract: This study has clarified the 10th of CIAM(International Congresses of Modern Architecture) rally held in Dubrovnik, Croatia at 1956 by investigating TeamX. TeamX continued long. And CIAM was not dismantled in 1956.

1. 研究の背景と目的

1928 年、建築家ル・コルビジェを支持する建築家・建築評論家の 24 名がスイスのラ・サラ城において「ラ・サラ宣言」を発表し、定期的に会合を持ち、「住宅・都市計画」を共通テーマに建築を社会的・経済的にとらえる試みを行うことを取り決め、CIAM を組織した。第 2 次世界大戦による中断や予定していた会場(開催国・場所)の変更を経て継続したが、1956 年、現在のクロアチア・ドブロブニクにおいて第 10 回大会が開催され、その準備を行った TeamX によって CIAM の思想は時代に合わないとして解体されたと記述されることが多い^[1]。本稿は第 10 回大会とそれ以降の TeamX の動向、会場となったドブロブニクについて再考する。

2. 第 10 回大会の開催経緯

第 10 回大会は、1955 年にアルジェで開催を予定していたが、アルジェリアの独立運度のため 1 年延期し、ユーゴスラビア(当時)のドブロブニクでの開催に変更された。第 8 回大会後組織の若返りが叫ばれ、第 10 回大会の準備には TeamX と呼ばれる若手の建築家があたった。メンバーの Peter Smithson (英国)、Alison Smithson (英国)、Jacob Berend Bakema (オランダ)、Aldo van Eyck (オランダ)、Georges Candilis (ギリシャ)、Shadrach Woods (米国)、Giancarlo De Carlo (イタリア)らは、何を議論すべきかを 1 年以上かけて検討した。この頃には英語の使用をめぐるル・コルビジェは退会しており、TeamX の出身国を見ても、参加者の質が変わりつつあったことが分かる。

3. ドブロブニク旧市街の歴史的経緯¹⁾

ドブロブニクは「アドリア海の真珠」と称される美しい城塞都市であるが、その始まりは 14 世紀から 19 世紀にかけて、ローマ帝国の支援を受けてカトリック、イスラムの両諸国との貿易によって栄えた。1667 年の地震により、都市の 4 分の 1 が倒壊し、復興にあたって政府が華美な装飾を禁じたため、よく似たファサードが連続することとなった。この時、メインストリートのパラツァ通りに面した建物は、1 階を店舗に、2・3 階は住居に、台所は屋上に置くことが決められた。さらに、現在は市内の建物屋根はオレンジ色(レンガ色)で葺くことが法律によって決められている。1806 年、ナポレオン軍の侵略を受けフランスの領土となり、第 1 次世界大戦後はユーゴスラビア王国の一部に、第 2 次世界大戦後はイタリアに侵略された。1991 年から 1995 年にかけての独立戦争では旧市街の多くが破壊されたものの、現在は破壊前の状態に修復がなされてい



Figure1. Palača Sponza (2015.08.08)

1 : 日大理工・教員・建築

る。この間、1979 年と 1994 年に旧市街地が世界遺産（文化遺産）に登録されている。

4. CIAM 第 10 回大会の概要

旧市街地の中心部ルジャ広場に面して建つスポンザ宮殿（Figure1.）は 1516 年に建設され、貿易による物資や財の管理所（税関）であったが、17 世紀には知識人の文化サロンとなり、1667 年の地震でも被害を多く受けなかった。現在は古文書館となり、一部が歴史博物館として公開されている。

詳細な経緯は不明であるが、このスポンザ宮殿が CIAM 第 10 回大会（1956 年 8 月）の会場に選ばれた。

会議の内容は吉阪の著書^[2]に詳しいが、第 9 回までの形式を踏襲して「住居に関する憲章」を作成するために、5 つのテーマ（Figure2.）について、前もって下案を作成し、会議の参加者が各国の状況を踏まえて意見交換をし、テーマごとに取りまとめを行って、憲章の成文とした（Sigfried Giedion 議長）。

1	People	人間社会
2	Land	自然
3	Man-made environment	人工的な環境
4	Factor of time	時間的要素
5	Action	実行

Figure2. Theme of Debate²⁾

しかし、会議の準備を行った TeamX は事前に 3 つの中心テーマとひとつのグループを提案（Figure3.）しており、第 10 回大会には TeamX の成果として、事例や調査結果が 30 数案の展示物として会場に並べられ、(1) Smithson、(2) Bill Howell、(3) Bakema、(4) Candilis（カッコ内は Figure3. のテーマ番号）によって発表が行われた。

1	Cluster	関係性のある塊
2	Mobility	移り変わり
3	Change and Groth	変化と発展
4	Habitat	住宅問題

Figure3. Theme by TeamX

このように、会議は従来からの CIAM の方法論を踏襲するグループと TeamX らの若手グループに 2 分され、主として年齢差からくる思考や経験の違いから、CIAM の改変が参加者から強く望まれ、中には「解散」の声もあがった。次回大会は運営委員会 CIRPAC が 12 月 31 日に辞任し、TeamX を中心とする再編委員会に委ねられることになった。つまり、CIAM は第 10 回大会内での解体はなく、1959 年 9 月にオランダ・オッテルローで開催された大会において正式に整理解体された³⁾。

5. TeamX のその後^[4]

その後も TeamX のメンバーは自身の提案を披露し、意見を求めるために定期的な会合を続けている。1960 年 7 月にフランス南部ニーム近郊のバニョール＝シュル＝セーズでの開催を皮切りに、1981 年 11 月まで年 2 回ほどの会合（計約 20 回）をパリ、ロンドン、ベルリンなどで行っている。しかし、1981 年 2 月 20 日に Bakema が亡くなり、この年以降の開催はなかった。会合では時にはゲストとして、Christopher Alexander や黒川紀章も呼ばれ、彼らの意見やプロジェクトに関する意見交換を行っている。

6. まとめ

本年 8 月にドブロブニクのスポンザ宮殿を訪ねた。美しい街並みに感動し、現地で CIAM 第 10 回大会に思いを馳せた。しかし、実際には CIAM の会合内容などについては教科書ほどの知識しかなく、もう少し深く探ろうと意欲がわいた。そこで改めて文献資料をもとにドブロブニクと CIAM、TeamX について確認を行ったところ、旧市街地が破壊と復興の歴史を持つこと。現在の街並みは簡素かつ統一感のあるように定められたルールに基づくものであること。一般に 1956 年の第 10 回大会で CIAM は解体したとされているが、第 11 回大会やその後の TeamX の存続などが明らかとなり、世界遺産に関する認識が深まるとともに、第 2 次世界大戦の前後で CIAM における建築や都市に対する議論が変化していったことを知ることができた。

注釈

- 1) 2015 年 8 月に現地を訪問した際の現地ガイドの解説による。
- 2) 文献[2]138 ページによる。
- 3) 文献[3] “Dubrovnik (Yugoslavia) 3-13 August 1956 - CIAM X congress: scales of association” および文献[4]による。

参考文献

- [1] 小嶋勝衛監修 (2008) 「都市の計画と設計 第 2 版」 共立出版
- [2] 吉阪隆正 (1985) 「吉阪隆正集第 9 巻 建築家の人生と役割」 勁草書房
- [3] <http://team10online.org/team10/meetings/1956-dubrovnik.htm> (2015. 9. 17 閲覧)
- [4] スミソン, A. (1991) “Team 10 Meeting 1953-1984” Publikatieburo Bouwkunde (New York)